
論説

ナショナル・シアター・ライブから5篇

狩 野 良 規

目次

はじめに

1. 見てきたような嘘——『ザ・オーディエンス』(*The Audience*)
2. 下支えの気骨——『スカイライト』(*Skylight*)
3. ことばはどこまで現実根差しているか——『誰もいない国』(*No Man's Land*)
4. 笑劇の衝撃——『一人の男と二人の主人』(*One Man, Two Guvnors*)
5. ベストシートの芝居って何だ——『アマデウス』(*Amadeus*)

はじめに

青山学院大学で「ナショナル・シアター・ライブ5周年記念シンポジウム」(2018年7月21日)を開催し、またシネ・リーブル池袋では7月中旬から約1カ月にわたってNTライブの作品11本のアンコール上映が行なわれた。僕はシンポジウムの“舞^ブ監”をやりながら講演者たちと約350名の聴衆の熱気にあてられ、さらに池袋の映画館で何本かの作品を見直し、あらためてNTライブについてあれこれと考える機会をもった。

そこで、これまでに日本に入ってきたNTライブの作品27本のうちから5篇を選んで解題を書くことにする。僕は昔から「解題」にこだわっている。劇評はスペースが限られている。後の人たちが読んで、どんな舞台だったのか、なかなかイメージできない。一方、論文は自分がすでに鑑賞した芝居の意義や価値について再考する手助けにはなるが、まだ見たことのない舞台を思い浮かべるよすがにするには、ちょいと難しい書き物すぎる。

最近は舞台中継のDVDがずいぶん販売されるようになったが、NTライブはDVDを作らない方針をとっている。あくまでロンドンの劇場に足を運ばない人たちに、できるだけ生の舞台に近い感覚で鑑賞してもらうための手段として映像を使っている。だから、大きなスクリーンと上質な音響設備を有する映画館で、大勢の観客と一緒に、暗がりの中で集中して見てもらうシステムを固守したい、家のテレビやパソコンで見てほしくない、と。

それは不便といえば不便だが、制作者側の気持ちがわからなくもない。何でも手に入りやすい、いつでもどこでも芸術作品（の記録?!）を楽しめる時代になったからこそ、消え去りつつある“聖なる一回性”に固執してもいいのではないか。だが僕には、そうであればなおさら、その生の舞台を記憶のかぎり文字にして記録しておきたいという欲求も湧いてくる。

なので本稿は、舞台を見ていない人たちがさながら見たような気になる解題、ちょっとだけ批評混じりというスタンスでいきたい。なにとぞご理解とご了承のうえ、ご笑覧のほど。

1. 見てきたような嘘——『ザ・オーディエンス』

イギリス流のウェルメイド・プレイとはこういう芝居を言うんだと納得させてくれる作品に、『ザ・オーディエンス』（ギールグッド劇場、2013年）がある。加えて、イギリス人ってのは、王室ものが好きだなあと、あらためて実感させてくれる芝居でもある。ナショナル・シアター・ライブ（NTライブ）が日本に入ってきた初年度の唯一の現代劇でもあった。

脚本は映画『クイーン』（2006年）でダイアナの事故死直後のエリザベス女王を描いたピーター・モーガン。今度は女王と歴代首相との会談を取り上げた。女王に扮するのは、その『クイーン』でもエリザベス二世を演じてアカデミー主演女優賞を受賞したヘレン・ミレン。そして演出はステイヴン・ダルドリーである。長篇映画デビュー作『リトル・ダンサー』（2000年）で国際的に知られるようになったが、イギリスではもちろん舞台の演出家として名をなしている。あのバーナード・ショーや「怒れる若者たち」ゆかりの、社会派演劇——左翼芝居と言ってもいい——の名門、ロイヤル・コート劇場の芸術監督だった人である。

舞台に侍従が登場し、「毎週火曜日の午後6時半から、女王は時の首相と非公式な会談を行なう」と語る。二人以外誰も同席せず、議事録を取らず、録音もなし。話題は国

家がその時々抱える諸問題から私生活にまでおよんだ（らしい）。1952年の即位以来、女王は、そして歴代の首相も、その濃密な会話の内容を一切口外していない。ただひとり、トニー・ブレアを除いて。ピーター・モーガン曰く、「それぞれの首相が何をやったかはすでに公になっている、謎は彼らの本当の気持ちの方だ」、また「夫婦でさえ週に1時間、こんなに面と向かって、率直に、信頼感をもって話すことはないだろう」と¹⁾。

最初に姿を見せるのは、保守党のジョン・メイジャー（在1990-97年）である。開口一番、「普通^{オーディナリー}の人間でいたかったのに」。彼はパブリック・スクールではなく、^{グラママー・スクール}公立学校出身。女王はその学校の名も、どこにある学校かも知らなくて困惑し、観客を笑わせる。そう、彼はサーカス芸人の息子、義務教育しか受けていないのに、サッチャーの後継者に指名され、首相になった。でも、首相になんかなりたくなかった、普通のままでいたかったんだ、と。

メイジャーが退出すると、女王は舞台上で赤い服から黒服に衣裳替えする。えっ、と思っている間に、さながらマジックのように。お見事。

時は1995年から1952年にさかのぼる。物語は時系列に沿っては進まない。父王ジョージ六世が他界し、エリザベスはまだ喪に服している。首相はウィンストン・チャーチル（在1940-45年、51-55年）である。弱冠25歳の女王をどこか小娘扱いしている。君主は話を聞き、メモを取り、まれに意見を言うだけ、それが立憲君主制というものだ、と。悩んでいる姿を国民^{サブジェクト}²⁾に見せてはなりませんぞ。

でも、君主の前では立ったまま話をするのがんばっていたチャーチルを、女王がなだめて椅子に座らせてしまうのがおかしい。さらに、戴冠式が即位から16カ月後というのは、あなたの政権の延命をはかるためではないかと、老臣をたじたとさせる質問も。

チャーチルに扮するのは、エドワード・フォックス。『ジャッカルの日』（1973年）で冷徹な暗殺者を演じた俳優が、こんなお爺ちゃんになっちゃった。風貌はさほど似ていないが、話し方や物腰はやっぱりチャーチル。1場面だけの出演ではもったいない名優である。

11歳の子供のころのエリザベスが現れる。将来は君主となる運命を担った娘が、本当の私って何なのと自問する。その間に女王は水玉の柄のステキな服に着替える。

1964年。労働党のハロルド・ウィルソン（在1964-70年、74-76年）が、場違いなところ

1) NT ライブ『ザ・オーディエンス』途中休憩時のピーター・モーガンへのインタビュー、および Peter Morgan, *The Audience* (Faber and Faber, 2013) の著者前書きより。

2) 英語では subjects を使っている。国王に仕える民衆というニュアンスがあり、今でも英和辞典には「臣民」なる古い訳語が残っている。イギリス人の大好きなことば。

ろに来たとばかりに謁見室に入ってくる。ポラロイド・カメラを肩からかけて、さながらお上りさんである。総選挙ではたった4議席差での辛勝だった。問題山積だ、人種暴動、失業対策、それからEEC加盟は拒否されるし、と愚痴をこぼす。自分は貧しい家の出身で、子供のころは木靴を履いていた。首相になって女房はカンカン、大学の研究員の妻になりたかった、と。でも、大英帝国の時代は終わった、支配階級はもういない、国民はひとつになったと³⁾、さりげなくいいセリフを吐かせている。

最後にポラロイド・カメラで当惑する女王とツーショットに収まる。女房が撮って来いと言うんだ。

お次はゴードン・ブラウン（在2007-10年）である。エリザベス女王が、首相に必要なのは安眠と歴史感覚だと語ることばに味わいがある。健康と幸福と平静な心。けれども私の家系には心の病が。ジョージ三世もヴィクトリア女王も……ブラウンが、スコットランドの目立たぬ大学の教員にでもなりたかったと述べると、女王は「誰にでも生きられなかった人生があるものですわ」。

ブラウンが彼の前任者トニー・ブレア（在1997-2007年）について語る時の愉快そうな顔が印象的である。若きブレアはサッチャー、メイジャーと続いた保守党政権の後、18年ぶりに労働党が政権を奪還し、北アイルランドに和平をもたらして人気絶頂だった。だが2003年、ブッシュと組んでイラクに侵攻してから、一気に国民の信頼を失った。とくに左派の知識人たちは、保守党ではない、労働党政権があんな戦争をするなんてと、一種のトラウマ状態に陥った。この芝居にブレアが登場しないことには、いろいろと意味がありそうだ⁴⁾。

ジョン・メイジャーがふたたび舞台に現れ、ダイアナが鬱になり自殺未遂におよんだのは、皇太子との結婚が原因だ、と。王室は費用がかかり過ぎる、存続のためには人気の挽回が必要だ、バッキンガム宮殿を見学できるよう一般に公開してはどうかと進言する。

3) 階級国家イギリスを象徴する一句に「二つの国民 (two nations)」がある。もともとは19世紀半ば、大英帝国最盛期の首相ベンジャミン・ディズレーリが、中流階級以上と労働者階級が互いに背を向けて生きている英国社会の状況を語った発言だが、21世紀の今日になってもしばしば聞かれる有名なことば。拙著『スクリーンの中に英国が見える』（国書刊行会、2005年）の第1部第2章「二つの国民と言語——『マイ・フェア・レディ』」をご参照。

4) NTライブで放映（2013年6月）された後のブロードウェイ興行以降は、ブレアが後半に短く登場するようになったとか。なお、ブレアだけは彼の希望で火曜日ではなく水曜日の晩に謁見した。侍従のセリフに、「女王はブレア氏が下野した時にはホッとして、また会見を火曜日に戻すよう望んだ」とある。

後半はスコットランドのバルモラル城のシーンからスタートする。毎年8月の週末に首相たちは王室の別荘に招待される。雨に濡れて寒そうなハロルド・ウィルソンが入ってくる。女王の飼い犬が彼の股の下を走り抜ける。場内から大拍手。イギリス人は犬が大好きだ。

首相は毛布を膝にかけて座る。女王が彼にブランデーを注ぐ。前半の謁見では、ウィルソンがティーカップを差し出しても、女王は紅茶を入れてくれなかった。最初は労働者階級出身のよそ者と思えた彼と君主との距離が縮まっている。彼は絶大なる記憶力を誇る。円周率 π を135桁暗記しているのを披露する。

待たされたのはアンソニー・イーデン（在1955-57年）である。女王はセシル・ビートンに写真を撮らせている。白いロングドレスに青のタスキ。いかにも女王らしい。ステキ！

だが、イーデンは気が急いている。スエズ運河への進攻⁵⁾を報告に来たのだ。やっと女王に会えた彼は、これは平和のための戦争だ、と。イーデンが急ぎ足で退出しようとしたところで、女王が質問する。イスラエルと共謀したのではないか、議事録からカットされた部分がある、議会も国連も知らない。寸分の隙もなさそうな紳士が女王の質問にしどろもどろとなる。「私を支持していただけますか」、「常に首相を支持するのが私の務めです」。ひとりになった女王はひざまずいて祈る。

イーデンは女王だけでなく、チャーチルにも長きにわたって待たされ、やっと保守党の首相となったが、スエズ動乱の失態を機にわずか1年で宰相の座を下りた。

マーガレット・サッチャー（1979-90年）は、女王が自分を批判した記事が新聞に載ったというので、激怒してバッキンガム宮殿に乗り込んでくる。いかにも大仰に膝を折って君主に一礼する。だが、以後はビジネスライクな話しぶり⁶⁾で、ユーモアのかけらもない。私は国民の自立心を育てたい。南アフリカ政策と英連邦^{コモンウェルス}について、女王と激しく意見が対立する。

最後にまた恭しく一礼して去ってゆく。場内からは“鉄の宰相”の滑稽ぶりに拍手喝采。ピーター・モーガンをはじめ演劇人たちは、そして劇場の観客たちも、サッチャーを毛嫌いしてはばからない⁶⁾。

5) スエズ動乱ないしは第二次中東戦争（1956年）。エジプトのナセル大統領がアラブ民族主義を掲げてスエズ運河を国有化した際に、イギリスはイスラエル、フランスと謀って出兵するが、国際世論の猛反発を食って撤兵した。この事件をもってイギリス帝国主義の終焉とされる、イギリス人にとっては断腸の現代史の一コマである。

6) 市販の台本にはないのだが、NT ライブでは終盤近く、サッチャーが皮肉られたところで、女王が「でも彼女は私と同年でしたの」と語って、ホロッとさせる一場がある。NT ライブ取

老女王が出てくる。老人らしい歩き方が上手。実年齢67歳のヘレン・ミレンが、25歳から86歳までの君主をひとりで演じきる。話しぶり、仕草、身体シルエットまで自由自在。

保守党のデヴィッド・キャメロン（在2010年－上演時の現在）との会談では、老いた女王が首相の話聞きながら居眠りする。ジェームズ・キャラハン（1976-79年）がちょっとだけ登場する⁷⁾。

女王は歴代の宰相の中で、誰がお好みだったのか。侍従が、「噂を信じるなら、ひとりだけとくに好きな首相がいたみたいだ」——ハロルド・ウィルソンがやって来る。記憶力が衰えている。アルツハイマー病の兆候がある。しんみりとした気分の会話の中で、ウィルソンが「あなたは根は左派ですな」と語る。女王が、「首相官邸を去る前に、夕食に招いてくださらない」。「そんな光栄に浴したのはチャーチルだけのはず。」ウィルソンを演じたのはリチャード・マッケイブ、何の役をやっても一癖ある名脇役である。

若いエリザベスが、「首相は変な人たちばかり」と言うと、女王は「人間として普通だということが、君主としてのあなたにとって最大の財産になる」と。「あの変な人たちがいちばんの味方」。「君主国がこれだけ長続きたのは、君主ではなく首相たちのおかげなの」。

架空の会話劇である。見てきたような嘘というやつだ。けれども、そこにイギリス人たちのこよなく愛する普通指向^{オーディナリネス}をはじめ、彼らのメンタリティの真実が照らし出されている。知的なユーモアと皮肉、そして一さじの感傷をまぶした典型的な英国のウェルメイド・プレイである。

2. 下支えの気骨——『スカイライト』

『スカイライト』（ウィンダムズ劇場、2014年）は、何の予備知識もなく、ただNTライブで上映されるというので映画館へ行き、僕の知らなかった新しい女優を発見し、物語の内容に胸が熱くなった。観劇体験というのはかくありたしと、ひさしぶりに心が躍った。

1995年初演のデヴィッド・ヘアー作品の再演である。演出スティーヴン・ダルドリー、美術はボブ・クロウリー。

録の2カ月前、2013年4月にサッチャーが逝去したのを機に、付け加えられたのだという。

7) 結局登場しなかった首相は、ハロルド・マクミラン（1957-63年）、アレック・ダグラス・ヒューム（1963-64年）、エドワード・ヒース（1970-74年）、そして初演時はトニー・ブレア。

ロンドン東部の荒れた学校で教師をしている30歳を過ぎたばかりの女性、彼女とはずいぶん年の離れた元愛人、そして彼の息子の三人芝居である。貧相なアパートのワンセット。ひたすらセリフの応酬で見せる、いや聞かせる典型的なストレートプレイである。

キャリア・マリガン扮するキーラ・ホリスが、ロンドン北西部のみすぼらしいアパートに帰宅する。暖房は小さな電気ストーブがひとつあるだけ。寒い。そこに突然若者が入ってくる。「ドアが開いていた。」エドワード・サージェント（マシュー・ビアード）、18歳。今は大学入学前のギャップ・イヤー中⁸⁾、キーラとは4年ぶりの再会だという。

エドワードは、1年前に母親が死んでから父親の様子がおかしくなった、彼と喧嘩して家を飛び出したと語る。父のトムは以前にキーラが働いていたレストランの経営者で、彼女とは6年間不倫関係にあったことが徐々にわかってくる。エドワードはキーラに助けを求めにやって来た。

二人はふつうに会話をしているが、その密度と緊張感は並大抵ではない。とくにキーラはほとんど聞き手、抑制の利いた物腰、きれいで上品な(上品すぎない)英語。イギリス人なら、彼女が中流階級の出身だとすぐに察するはずだ。一方のすれていない青年は、まあ、労働者階級である。だから、トムは成り上がりの、いわゆる“ニューリッチ”というやつだ。息子は、父親の人生への姿勢が気に入らない。

だが、キーラはエドワードに共感しても、もうサージェント家には首を突っ込めない、と。エドワードが、父親と一緒にいたころのことでなつかしく思い出すのは何かと聞くと、キーラは「おいしい朝食が恋しいわ⁹⁾」。彼は「助けてほしかったんだ」と言い残して、アパートを去っていく。

こういう室内劇、ふつうに考えれば人物たちを外部から遮断して、緊迫したやりとりをさせるだろう。しかし、オッと思わされるのはボブ・クロウリーの舞台装置である。後方の部屋の壁が開閉する。壁がなくなると、その後ろに集合住宅の風景が見渡せる。いかにも労働者対策のために建てられたコンクリート造りのビル¹⁰⁾。視野を外にも開い

8) イギリスでは大学の入学試験に合格した学生が、高校卒業後数カ月ないしは1年間くらいギャップ・イヤー (gap year) なる休暇をとって、アルバイトなり海外ボランティアなりと、大学では得られない経験をすることが当たり前になっている。大学では学問をする。忙しい。その前に自分の目で社会を見る。いいじゃないか。

9) 食事のまずさでは定評のあるイギリス。でも、かの国のフル・ブレックファーストはまあまあかな。サマセット・モーム曰く、「イギリスでおいしい料理を食べたかったら、1日に3回朝食をとることだ」。

10) イギリスの中流階級は、田舎風の古い家を買って、自分たちで内装をしつらえるのが、いちばんのお好み。都会で生活すれば、そうもいかないが、少なくともこの芝居に出てくる近代的なコンクリートの集合住宅には住もうとしない。

て、こんな物語、庶民生活にはよくある話だよと社会性をもたせる。これは諸刃の剣で、せっかくのシリアスな会話劇が散漫になるおそれがある。だが、そうっていないのは、イギリスの俳優たちの力量ゆえである。

エドワードと入れ替わりに、2人目の^{ちんにゆう}闖入者が現れる。トム・サージェント、扮するは1997年にも同じ役をやったビル・ナイである。う～ん、キーラとはちょっと年の差があり過ぎかな。17年前の彼の舞台を見たかった。でも、爺さんだけど、動きは^{はつらつ}潑刺、演技も絶品。キーラは「あなたはいつも男っぽさが過剰だったわ」と。思いつき格好をつけた成り上がり者。しかし、演じているんだけど、リアリズムの演技の基礎ができています。そういう達者な役者が過剰に演じると、それはビル・ナイではなくトムが人生を演じているように見える。

トムは、^{スカイライト}闘病中の妻アリスが天窓から鳥を眺めていたと語る。キーラは勤め先の学校の話をする。校長は車を盗まれ、飼い猫をオープンで焼かれ、ついに転勤していった。警官さえ生徒に襲われた。トムが愚痴る。たしかに景気はよくなった、でも会社の株を上場してからは銀行マン上がりのコンサルタントが口を出してきて、うんざり。社長の俺の2倍の給料を取るんだぞ。1980年代半ばから変わった、今や店の客より銀行が戦争の相手だ、と。

キーラとトムは親子ほども年が離れているのに、[・][・][・]対等な人間同士として語り合う。西洋社会だなあ。日本ではまず成立しない対人関係のあり方だ。

また、キーラはずっと料理をしながら話す。トムが横から「唐辛子は先に炒める方がいい」と口出しして、劇場の空気をやわらげる。上手に緩急をつけるものだ。

キーラは18歳の時、初めてロンドンに出て行き、たまたまウェイトレス募集の貼り紙を見て入ったのがトムとアリスのレストランだった。が、その場で採用されて1時間もたたないうちに、夫妻の娘が事故にあって入院したという。キーラはいきなり店を任されててんでこ舞い、そして夜更けまで二人が病院から帰ってくるのを待っていた。「人生で最も不思議な夜だった」とトム。初対面の娘にブランデーとコーヒーで迎えてもらった。キーラも「なぜだかわからないけど、ここが私の居場所だ」と感じた。彼女は海岸沿いの町の^{ソリシター}弁護士の娘、数学が好きで大学に進学した。

やり手の店のオーナーと知的な若い娘はやがて男女の仲になり、しかし娘はアリスに知られないことが絶対条件だと繰り返した。キーラにとってはアリスも大切な人だった。

と、キーラが突然トムの前から姿を消して4年。今、唐突に再会した二人の間の微妙な緊張が[・][・][・]小さな会話を続けるうちに、少しずつほぐれてきたのだろうか。相手の話に耳を澄ますキーラの表情と控えめな^{リアクション}反応が魅力的。キャリー・マリガン、うまいなあ。僕は小柄で、ショートヘアーで、微笑を絶やさず、イギリスの中流階級の寛容の美德を体現

する彼女に一夜にして惚れ込んだ。NT ライブを見たその日は、不思議な夜だった！

おっと、イギリスは今でも階級国家である。中流階級と労働者階級の間の壁は現在でも完全に取り払われていない¹¹⁾。だから、トムとキーラの愛は、年齢差と不倫関係と、そして階級という障壁を越えた禁断の情事？！

けれども、センセーショナルにあらず。64歳のビル・ナイと30歳にもならないキャリー・マリガンは、この二人だったら、そういうこともありかな、と自然に思わせてくれる。いや、デヴィッド・ヘアーの地味だが人間の心の機微を書き込んだ脚本もまた、いぶし銀の職人芸。

でも、トムが運転手を外で待たせていると聞いて、キーラは憤る。「あなたは平気で人を物のように扱う。」さらに彼女がエドワードの話をする、トムが興奮しはじめる。触れてほしくない話題なのだ。キーラも自分のことは我慢できても、エドワードについては——どうして息子の気持ちをわかってあげないの？ それまで聞き役だったキーラがついに爆発、食卓上の食器をぶちまける……しばし後、女は「運転手を帰してくれ」と言って、男に抱きつく。

休憩が入って、後半。夜中の2時半ごろ。外は雪になっている。起き出したキーラが、食べそびれていたパスタソースを皿に盛って口に運ぶ。トムはシャツを着ている。あゝ、そうなんだ。男と女、摩訶不思議な動物。

ひさしぶりに体を合わせた男女の、その後の会話。うん、こういう時に正直で素直な本音話が飛び出すものだ。でも、キーラはやっぱり職場の話をする。毎朝6時半前に家を出て、遠距離通勤している。二階建てバスの上階に座り、いい本を読み、サンドイッチをかじり、乗り合わせた人々の話に耳を傾ける。貧困層や移民の子たちが多い学校の仕事は厳しい。英語が母語でない生徒が4割。就任早々、唾を吐かれ、クソ野郎と罵倒された。けれども、ちゃんと生き残るテクニックは覚えたわ。子供たちを甘やかしてはダメ。私はこれまで夢のような30年を過ごしてきた。だけど、しっかり目を開ければ、この国の現状が見えてくる。

いい話だ。しかし、労働者階級の掃き溜めから這い上がってきたトムには、育ちのいいキーラの使命感は、甘ちゃんの“上から目線”の幻想とも映る。君は大学を首席で卒業した、大学でだって教えられる。なのになぜ？「この国だけだよ、出世することが犯

11) イギリス人に聞けば、かの国はすでに「階級なき社会 (classless society)」になったと宣^{のたま}うだろう。だが、そう口にするということは、とりもなおさずまだそれが実現していない証左ともいえる。日本で繰り返しヒステリックに「国際化社会」と「脱学歴社会」が叫ばれていることと比べられたし。

罪扱いされるのは¹²⁾。」

キーラが熱してくる。どうして子供たちを助けるかですって、助けなきゃいけないからよ。右翼の詭弁家たちには、もう飽き飽きだわ。自分是指1本動かさずに、満足げな顔をしてオフィスや銀行に座っているだけ。ソーシャル・ワーカー プロベিশョン・オフィサー 社会福祉指導員や保護観察官やカウンセラーの仕事をして、せせら笑っている。口ばかり、きれい事ばかり。現場で自分の時間と労力を捧げる気のない人は、フ・ァ・フ・ク・・オ・フ 引っ込んでいて！¹³⁾

キャリー・マリガン（注）の口汚い捨てゼリフに、場内から拍手が起こる。もっとも、こういう長ゼリフ、下手くそな俳優がしゃべったら説教臭くて聞いていられないから、怖いんだけど。

キーラがなぜトムのもとを去ったのか。あの日、トムが電話をしてきて、アリスに二人の関係を知られた、と。キーラが休暇先から出したラブレターをアリスに見られた。不用意だった、台所に置きっぱなしにした。だが、キーラは、トムが故意に手紙を妻の目に触れさせたのではないかと疑っている。キーラはアリスに合わせる顔がない。アリスはその後、トムに心を開くことなく他界した。

キーラは心からトムを愛していた。今も愛している。しかし、二人の価値観はすれ違ったまま。キーラがトムのためにタクシーを呼ぶ。イギリスの芝居だ、“予定調和”の和解に終わる結末にはならない。トムは、「またレストランに來いよ、悪くない食事を出すから」と言って、部屋を後にする。

幕間でデヴィッド・ヘアーがインタビューに答えて、「これは初演当時の“今”を描いた作品だ」と述べている。そう、親密な恋愛ものをよそおってはいるが、明らかにマーガレット・サッチャーとその後の保守党政権の政策に異議を唱える議論劇である。サッチャーは1980年代、不況の英国経済を立て直すべく、福祉国家から弱肉強食の資本主義

12) 食うに困らぬ人間は、それ以上の金や出世を求めてはいけないというのが、上の階級のイギリス人がもつ昔ながらの人生美学である。その点は、アメリカ人や、アメリカ流を善しとする日本人一般の人生観、価値観と明らかに異なる。また、下の階級も社会的上昇はめざましいのが常識。つまりは、成り上がりの出世主義者をひどく嫌うのだ。そこへいくと、サッチャーは雑貨屋の娘、下層中流階級の出身なのに保守党の議員になりたがり、ついには銭金と無縁な分野をバッサバッサと切り捨てて“鉄の宰相”と呼ばれた。そりゃ、いずこの階級からも“よそ者”扱いされ嫌悪されて当然なのである。

13) そうね、僕も30年以上教室で学生と付き合っ、誰もやり手のいない教職員組合の委員長も3年やって、自分のことを左翼だとは思っていないけれど、しかしほんとうにシラケさせられるのは、教室現場を知らない人たちの声高な学校批判、体制側のコロコロ変わる教育政策、そして口当たりのいい空理空論の大学改革論あたりか。Fuck off !

体制へと大きく舵^{かじ}を切った。起業家や銀行をもち立て、しかし金にならない教育や芸術などの分野にはバツサリとおおなた^{おおなた}と大鉈を振るった。おかげで1990年代のイギリス経済は活況を呈するようになったが、そうした拝金主義^{ひず}のもたらした社会の歪みもまた大きかった¹⁴⁾。その後始末に奔走したのは現場の人間たちだったんじゃないか、と。

芝居はさらに、短い一場が続く。布団にもぐったキーラの耳にけたたましい玄関ブザーが聞こえる。朝、エドワードが食事を持ってやって来る。高校の友人がリッツ・ホテルの厨房に勤めていてさ。キーラがなつかしそうな、泣きそうな顔をしてナブキンの匂いを嗅ぐ。食卓に豪華な朝食を並べたエドワードが、最後に白いバラ一輪を花瓶に入れる。二人が幸福そうに朝食をとりはじめ、背景の集合住宅の窓々に明かりがつくのを見せて、幕となる。

なるほどこの芝居、何も解決していないのに、心が奮い起つ。ラストのハッピーな朝食風景は、キーラへのご褒美、そして社会の下支えに身を委ねているすべての人々へのデヴィッド・ヘアーのエールである。

3. ことばはどこまで現実に根差しているか——『誰もいない国』

「おゝ、そういう芝居だったのか!」と、長年のモヤモヤが一気に晴れる思いがしたのは、NT ライブで『誰もいない国』(ウィンダムズ劇場、2016年)を見た時だった。大御所イアン・マッケランとパトリック・ステュアートの掛け合いの妙に、若いころからずっと鬼門だったハロルド・ピンターの芝居を、初めて心から面白いと思えた。さらに舞台終了後、出演者4人に演出のショーン・マサイアスを加えた男5人のトークショー(司会だけ女性)もまさに絶品。難物のピンター劇を見て、こんなにウキウキした気分になれるとは、今日は途中で寝ないようにせねばと握りこぶしで映画館に入った時には、想像だにしていなかった。

2幕劇、男ばかり4人の芝居である。ト書きには「ロンドン北西部にある家」と記されている¹⁵⁾。どうやらハムステッドらしい。夏の夜と翌朝の話。NT ライブのカメラは舞台上方の木々から映す。舞台中央に酒類を置いたカウンターがある、円形のゴージャスな部屋のワンセット。『ガーディアン』誌のマイケル・ビリンントンの劇評には、「豪華

14) 前掲の拙著『スクリーンの中に英国が見える』の第4部第9章「労働者階級映画の流行——『プラス!』、『フル・モンティ』、『リトル・ダンサー』」参照。

15) 戯曲『誰もいない国』からの引用は Grove Press 版(1975年)からの拙訳。なお、邦訳には『ハロルド・ピンター全集3』(新潮社、1985年)所収の喜志哲雄訳がある。

な刑務所」のようだとする¹⁶⁾。

開幕、ハースト（パトリック・ステュアート）がスプーナー（イアン・マッケラン）にウィスキーを注ぐ。自分はウォッカ、乾杯して一気に飲み干す。二人とも、もうだいぶ聞こし召しているよう。このお屋敷の主人ハーストは仕立てのよさそうな服、対してスプーナーのスーツはヨレヨレである。

ショボい身なりのマッケランが長々としゃべる。紳士然としたステュアートがじっと聞いている。いや、細かい表情や仕草できっちりと^{リアクト}反応している、その様子をカメラがアップで丁寧に捉える。それだけで楽しい。アップに耐える、とはこのことだ。場内からも酔っ払いの爺さん二人の雑談にたびたび笑いが起こる。ピンターの芝居でこんなに笑いが出るとは、僕にとっては新鮮な驚きである。

スプーナーがハーストに、あなたはよくハムステッド・ヒースをうろつくのかと聞く。客席からまた笑い声。NT ライブはロンドンの観客の反応がわかるのが、大きな魅力のひとつである。ハムステッド・ヒース——そこはゲイたちの出会いの場だとか。おっと、僕もロンドン在住の男友だちと一緒にその丘を歩いたことがある。いやだな、周りからどう見られていたんだろう?! まあ、昼間ではあったけど。

ハムステッドにある「ジャック・ストローの城」の話も出てくる。ディケンズが通ったバブだというので、無知な僕は写真を撮りに行った。けれども、有名なゲイバーなんだって。危ねえ、危ねえ。

貧相なへば詩人のスプーナーが、階級の異なる、そして初対面らしき文学者ハーストのお屋敷をどうして夜遅くに訪れて、酒を酌み交わしているのか。要するに、^{そう}いう^{関係}らしいのだ。もっとも、この老人たちが同性愛者だとは戯曲のどこにも書いてない。ピンター劇の常、すべては曖昧^{あいまい}模糊^{もこ}としている。

饒舌でしつこいスプーナーに奥さんのことを聞かれて、ハーストはついに腹を立て、酒のグラスを投げつけるが、命中しない。ハーストは「誰もいない国……動かず……変わらず……老いることもなく……とどまる……永遠に……冷たく……静かに」。酔いのまわった彼は部屋から^は這い出してゆく。スプーナーは「この光景、前に見たことある」と。セリフも状況も漠としているが、デジャヴュ感が漂う。

ハーストと入れ替わりに若い男フォスター、さらに中年のブリグズ（オーウェン・ティール）が入ってくる。ハーストの秘書と召使兼ボディガードらしいのだが、彼らが何者で、主人と^{どう}いう^{関係}なのかは、最後まではっきりしない。だって、ピンター劇だもの。

16) 『ガーディアン』2016年9月20日付けの劇評より。

スプーナーが二人に怪しまれ、問い詰められている間に、ガウンを着たハーストが戻ってくる。少し眠ったようだ。ハーストはまた酒を飲みはじめ、多弁になるが、スプーナーが誰だか覚えていない。

第2幕は翌朝。スプーナーは出された朝食のスクランブルエッグとトーストをムシャムシャと食べ、シャンペンを1本空けてしまう。これを毎日舞台でやるのは大変だ。トークショーでマッケランは、「ピンターには感謝しているが、スクランブルエッグにはうんざりだ、週に8回も食べさせられては」と。また、ショーン・マサイアスは近くの映画館でNTライブを見てからトークショーに駆けつけ、「アップの映像などで、自分が演出した芝居の視野が広がった」と語っていた。そう、この作品はとくにアップが効果的だった。なにせ長老二人のリアクションを映画館の大きなスクリーンで堪能できるのだから。もっとも、トークショーではパトリック・ステュアートが「[俺の顔は]どれくらい大きく映っていた？」と茶化しまくっていたが。

さらにマサイアスが「1975年の初演の舞台を見たが、よくわからなかった」と語ると、「誰と一緒に見たんだ」と冷やかされる。場内は爆笑。実は、マサイアスとマッケランはかつてパートナーだったことがある、それを観客は皆知っているわけだ¹⁷⁾。

なので、芝居もトークショーも、単に男だけという雰囲気を超える異様な盛り上がりを見せていた？!

ストレートのピンターがゲイの話を書いたのは彼の反骨精神に由来するともいえよう。英国で1737年に施行された演劇検閲法以来の検閲が廃止されたのは、やっと1968年のことである。それからまだ6年しかたっていない時期にこういう淫靡な戯曲をものするのは、けっこう大胆な所業だったはず¹⁸⁾。

お話は舞台に戻って、ハーストはそろそろ退散しようとしているスプーナーを突然チャールズと呼び、オックスフォード大学時代の思い出話を始める。彼を旧友と間違えているのか、それともそういうふりをしてからかっているのか。

ハーストは、君の女と僕は付き合っていたんだ、と。当惑し呆れるスプーナー。だが、

17) イアン・マッケランはサッチャー政権が同性愛の拡大を阻止するために制定した条例「セクション28」に反対して、1988年にラジオで自らがゲイだと告白した。また、ウィキペディアによると、マッケランとマサイアスは1978-88年の10年間ほどパートナーだったという。トークショーでは、「1975年には誰と付き合っていたんだ」とからかわれたわけである。さらに、初演時にスプーナーに扮したジョン・ギールグッドも——まだカミングアウトする時代ではなかったもので、一般には知られていなかったが——そっちの人だった。

18) トークショーでは、1970年代にあえて卑猥なことを多用していたピンターの勇気が話題になっていた。

ほどなくスプナーは卑猥な作り話(?)でハーストに逆襲する。その淫^{みだ}らな男女関係、いやそもそも二人がオックスフォードで同窓だったというのも、怪しいかぎり。真相はすべて藪の中である。

ハロルド・ピンターは初期の作品から一貫して、ことばが現実にとどこまで根差しているかをモチーフにしてきた。西欧近代思想が自信をもつほど言語は事実を再現できないのではないか、近代のリアリズム演劇がめざしたように人間の内面心理や行動の動機を我々は日常ことばで説明していないではないか、と。そんな言語の不確かさ、信頼の置けなさをザラリとしたタッチで突きつけてくる。

心理を解き明かさない心理劇、不気味で不可解、結末もカタルシスもなし。テーマや方向性だけを論じれば、ベケット、イヨネスコらに代表される不条理演劇の系列に分類されるだろうが、僕はむしろピンターが若いころに熱中したというルイス・ブニエール、また彼も脚本を書いたジョゼフ・ロージーの映画¹⁹⁾にピンター劇と同じ匂いを嗅いでいる。シニカルで挑発的で、見る者の心がザラザラしてくる舞台。

それを日常的な会話もかくやというごく自然な調子でしゃべって客席を沸かせるイアン・マッケランとパトリック・ステュアート。まさに“芸”の域である。

ピンターは後年、アメリカのニカラグア介入²⁰⁾に反対を表明したところから過激な政治的発言を繰り返すようになる。2005年のノーベル文学賞受賞記念講演では、自らの文学論もそこそこに激的な反米演説に多くの時間を割き、BBC テレビはついにその講演を放送しなかった²¹⁾。

僕は当初、ピンター劇のテーマと彼の政治的な姿勢が、今ひとつ頭の中で交差しなかった。しかし、米大統領トランプの出現でにわかにピンターの危機意識が実感されるようになった。ことばが真実を伝えないどころか、堂々と真実を隠すために使われている²²⁾。

19) ピンターは赤狩りでイギリスに亡命したジョゼフ・ロージー監督の『召使』(1963年)、『できごと』(1967年)、『恋』(1971年)で脚本を担当した。『召使』に関しては、前掲の拙著『スクリーンの中に英国が見える』の第4部第5章「1960年代の心理映画——『コレクター』、『反撥』、『召使』」をご参照。

20) 中米のニカラグアでは、ソモサ独裁政権が40年以上続いていたが、左派武装革命組織サンディニスタが蜂起し、1979年にいわゆる「ニカラグア革命」を起こして、新政権を発足させた。しかし1980年代には米CIAによって送り込まれた反政府右派勢力コントラとの間に凄惨な内戦が勃発した。

21) ハロルド・ピンター『何も起こりはしなかった——劇の言葉、政治の言葉』(喜志哲雄編訳、集英社新書、2007年)に、ピンターのノーベル文学賞受賞記念講演録が掲載されている。この新書は彼の政治的な姿勢を知るためにも格好の書物。一読をお勧めする。

22) 同書の巻末にある「編訳者あとがき」参照。ピンターの勘どころを的確に押さえた解説である。

スプーナーはハーストに自分を売り込み、フォスターとブリグズが反発する。誰もハーストの家から出ていきたくない。ゲイにとって実に居心地のよいお屋敷ってか。誰もいない国、ハーストが「その国に乾杯だ」、幕。

4. 笑劇の衝撃——『一人の男と二人の主人』

ナショナル・シアターの芸術監督（在2003-15年）で、NT ライブを始めた人としても知られるニコラス・ハイトナーが演出した『一人の男と二人の主人』（NT リトルトン劇場、2011年）は、創設から半世紀になるナショナル・シアター史上、最もおバカな喜劇といえよう。いみじくもハイトナー自身がNT ライブの幕間インタビューで語っている、「喜劇の稽古は大変なんだ、とくにこういう笑ってもらう以外に何もない芝居は」と。そりゃそうだろう、もし不評だったら、天下の国立劇場ナショナル・シアターが何やってんだ、こんなくだらな、意味のない、深みのない作品を作りやがってと、ボコボコにされるはず。作り手は冷や汗タラタラ、とても笑ってなんかいられないだろう。

笑劇（farce）ということばがある。喜劇（comedy）より一段格下にみられる。喜劇には案外意味がある。人間の内面の邪悪性とか、社会の歪みゆがとか、我々がふだんあまり見たくない題材は、悲劇仕立てでシリアスに描くと重っ苦しすぎる。だから、笑いに包んで喜劇にする。とくにイギリスないしはヨーロッパ文学には「諷刺文学」の伝統がある。悲劇よりもずっと辛辣かつブラックに人間や社会の暗部を諷刺する、そんなシリアス劇よりも痛烈で厳しい喜劇が、かの地域にはたくさん存在する²³⁾。

それに比べて、笑劇は“お笑い系”と言おうか——日本の喜劇は全部そっちに入っちゃう?!——、イギリス演劇なら19世紀後半以降に盛んになったミュージック・ホールが思い浮かぶだろうか。

原作はカルロ・ゴルドーニ作『二人の主人を一度に持つと』（1745年）である。コンメディア・デッラルテ（Commedia dell'arte）——16世紀に北イタリアで生まれ、ルネサンス期ヨーロッパを席卷した即興喜劇、仮面をつけた類型的な登場人物が大ざっぱな状況設定の中でセリフや仕草を臨機応変に織り交ぜながら、笑いを振りまく。ゴルドー

23) とりあえず拙著『スクリーンの中に英国が見える』の第1部第8章「イギリスの喜劇——『マダムと泥棒』、『ウィークエンド・ラブ』、『ピーターズ・フレンズ』、『フォー・ウェディング』」、第9章「イギリスのブラック・ユーモア——『ワンダとダイヤと優しい奴ら』、『モンティ・パイソン 人生狂騒曲』」、第10章「諷刺とは何か——『未来世紀ブラジル』、『時計じかけのオレンジ』、他」をお読みいただきたい。イギリスのユーモアが、日本人の考える“癒し”中心のそれといかに異質でブラックかを語ったつもりである。

ニはちょっと下火になったその即興演劇を18世紀に改革した劇作家である。

そして、道化者の召使アルレッキーノ（原作の役名はトゥルッフアルディーノ）が速射砲のようなセリフと体全体を使った大振りの演技で観客を大笑いさせるゴールドーニ劇を現代に蘇^{よみがえ}らせたのが、ジョルジョ・ストレーレル（1921-97年）率いるミラノ・ピッコロ座であった。僕は同劇団の二代目アルレッキーノ役フェルッチョ・ソレーリがその全盛期に主演した『二人の主人を一度に持つと』の来日公演（1979年、新宿文化センター）を見て感激、その舞台中継ビデオを今でも宝物のように大事にしている。彼の全身で演じる即興芸は、チャップリンに匹敵する。ブラボー！

ナショナル・シアターの『一人の男と二人の主人』は、そのゴールドーニの翻案劇である。脚本を担当した売れっ子劇作家リチャード・ビーンは、1963年のブライトンに設定を移している。

開幕はチャーリーのスピーチから——「人前で話すのは好きじゃねえ。今まで正式にしゃべったのは3度きり、そのたびに判事の奴、俺を刑務所送りにした」と。いいねえ。こいつ、お天道様に顔向けできない奴だなと、観客に臭わせる。これが下手くそなシナリオだと、私は地元のギャング、アヒルのチャーリーと申します云々と、最初から説明してしまう。そんな“説明ゼリフ”はつまらない。

今日はチャーリーの娘ポーリーンが、俳優志望のアランと婚約した祝いの日。でも、実はポーリーンには親の決めた婚約者ロスコーがいたのだが、彼が死んだと聞き、晴れて相思相愛のアランと結婚できることになったのだ。ところがロスコーの用心棒フランシスが訪れ、ロスコーは生きてるぜ、と。一同、驚きを隠せない。しかし、やって来たのは、男装してロスコーに化けた彼の双子の妹レイチェルだった。レイチェル曰く、彼女の恋人スタンリーがロスコーを殺してしまい、警察に追われている、でも彼女は兄を殺害したスタンリーを変わず愛している……

と、この芝居、状況設定と人物関係と、おまけにストーリーも実にこんがらがっていて、わかりづらい。だからやめた、それらを紹介するのは。とにかくひょんなことからフランシスが、ロスコーに変装したレイチェルとロスコーを殺したスタンリーの両方に用心棒ないしは召使として雇われたために、彼が忙しく立ち回り七転八倒する喜劇と、それだけ知っていれば3時間笑いつづけられる。

そう、観客は初見の作品の場合、まずはストーリーを追うものである。だが、このナショナル・シアターの笑劇ではそれができず、できずとも気にならないほど楽しめる。その点は、ゴールドーニの原作も同じ。いろいろな意味でNTの翻案版にはヨーロッパ演劇の古典に対する敬意^{リスペクト}を感じる。好き勝手に変えていない。変えるどころか、忠実にゴ

ルドーニ劇の勘どころを捉えたうえで、イギリス的な要素を加味している。

いつも空腹で好色なアルレッキーノ、彼に相当するフランシスを演じるのは、おデブの人気者ジェームズ・コーデン²⁴⁾である。こいつがまた、よくしゃべり、体型に似合わずよく動く。パブ「クリケットーズ・アームズ」の前で腹ペコのフランシスが内心の自分と闘う一人芝居は、フェルッチョ・ソレーリに劣らぬ肉体芸。なるほど演劇が“人力”の芸術だと、あらためて実感させられた。

他にも濃いキャラの登場人物たちがザックザク。レイチェルは小柄で胸がなく、女がごろつきの男に化けているのは見え見え、でもリング・スターにそっくりで笑える。逆にデカパイなのは、チャーリーの帳簿係で、フランシスが恋するドリー。スタンリーはパブリック・スクール²⁵⁾出身者らしい物腰で、上流階級のいやらしさを醸す。また、スタンリーとともにまともな英語をしゃべっているのは、アランの父親で辣腕弁護士ハリー・ダングルである。彼はラテン語を連発してインテリぶりを見せつける²⁶⁾。俳優志望のアランは、客席に向かって斜に構え、いかにも下手くそに大仰なセリフを語る。これ、下手な俳優がやるとつまらない。達者な役者が下手な役者を演じて、初めて面白くなる。

と、これらの人物たち、コンメディア・デッラルテの類型化された役柄にきちんとはめこんだうえで、イギリス風に^{がんこつだったい}換骨奪胎している。みごとな脚本である。

そしてもうひとり、87歳のボケボケの老給仕アルフィーは、階段落ちを何度も繰り返して、客席を笑いの渦に巻き込む。やるぞ、やるぞ、とわかっているのに毎度笑ってしまう。いったい笑わせる側は、自分で笑ってはいけないというのが、コメディアン鉄則だ。アメリカや日本の喜劇は、その鉄則を破っていることが多すぎる。だが、アルフィー

24) ジェームズ・コーデンはアラン・ベネット作、ニコラス・ハイトナー演出の学園青春もの『ヒストリーボーイズ』(2004年、映画は06年)で、太った生徒に扮して一躍顔を知られた。若い人には、米CBSテレビの長寿トーク番組『レイト×2ショーwith ジェームズ・コーデン』の司会者といえはわかるだろうか。横断歩道で信号が青の間だけミュージカルを演じるおバカギャグの動画が、たくさんYouTubeに転がっている。

25) パブリック・スクールは、日本でいえば中高一貫の全寮制男子校ってところか。もともとは19世紀の大英帝国の時代に、上流階級の子弟を将来の植民地官僚に養成すべく発展した。今日でもオックスブリッジを出ているより有名パブリック・スクール出身という方が聞こえがいいとか。そんなエリート意識の固まりぶりをスタンリーは大仰に演じて、笑わせてくれる。

26) ラテン語は古代ローマの言語にして、その後もカトリックの僧侶やルネサンスの人文主義者たちが聖書の言語、学術言語、そして唯一の“国際共通語”として重視した。第二次大戦が終わるくらいの時期まで、ヨーロッパで教養人といえば、ラテン語ができることが第一条件だった。そのラテン語を弁護士が育ちの悪そうな面々の前で乱発するおかしさ。いや、その前に、ハリーとスタンリーだけしゃべっている英語が違う。イギリス人は階級ごとに話す英語のなまりが異なる。彼らは一言しゃべれば、お互いにどの階級の人間か判別できるとか。あな、恐ろしや。

は最後のアンコールまでニコリともしないで、役柄に徹している。トム・エッデンというまだ若い俳優。『アマデウス』では、皇帝ヨーゼフ二世に扮している。

1963年。それはビートルズが大ブレイクした年、ケネディが暗殺され、東京オリンピックを翌年にひかえ、そしてナショナル・シアターがスタートしたのもこの年だ。1950年代に出現したテレビによって、ミュージック・ホールは衰退の一途をたどった。『一人の男と二人の主人』^{オマージュ}には、その古きよき笑劇の世界への敬意がある。

ミュージック・ホールでは、リアリズム演劇とは違って、観客にさかんに話しかけた。フランシスが客席に向かって「腹ペコだ、誰かサンドイッチを持っていないか」と言う、と、観客のひとりが「持ってるよ」。コーデンは苦笑いしながら、本当か、その答えは期待していなかったぜ、芝居が変わっちゃった、と。また観客を舞台上上げて、荷物を運ばせたり。

圧巻は同じく舞台上でフランシスの手伝いをさせられた女性が、困惑し、右往左往し、はては水をかけられ、消化器の消火剤まで浴びせられる。これがただの観客なのか仕込みなのか、なかなかわからない。NT ライブでは、休憩中に舞台裏を見せ、そこにこの女性がいるので、あゝ、やっぱり役者だったんだと安心できる仕掛けなのだが。つまりは、女優がシロウトの観客を演じていたわけで、そのリアリティ。まさにプロの演技である。

幕間にバンドの演奏が入る。開幕時には、バンドマンのひとりが洗濯板で演奏している。スキッフル・バンドといって、日常そこいらへんにあるものを楽器代わりに使う。イギリスでは1950年代に大流行したとか²⁷⁾。役者たちも飛び入りで歌や演奏を披露する。アランは楽器の代わりに自分の胸を叩いて、いい音を出す。

ピッコロ座は背景のカーテンひとつで場面転換をする。さまざまな風景が描かれたカーテンをスッと引けば、別のシーンになる。ナショナル・シアターは大きな額縁舞台での転換。いちいち暗転していたのでは、観客の緊張感が保てない。そこで幕間に生演奏を挟んでいるわけだ。

初めて見た時は何も考えずに笑い転げたこのドタバタ喜劇、再見すると、あれま、セリフにきわどい小ネタがたくさん入っている。フランシスはスキッフル・バンドをやっていたが、「ビートルズが出てきたので首になった、あいつらハンブルク時代は下手く

27) スキッフル・バンドの話をはじめとして、いろいろな小ネタについての的確な解説をしているのが、小田島恒志「イギリス的な、あまりにイギリス的な笑い」(NT ライブ『一人の男と二人の主人』劇場公開時パンフレット、アジョン・ス・ドウ・原生林、2017年 所収)。参考にさせていただいたが、先に書かれて悔しいというネタも多々あり。

そだったのに」と。また、「1963年、革命は近づいている、20年以内に首相官邸に女性が入り、女性らしく貧しき者たちに同情する政策をとるだろう」と。むろん皮肉たっぷり、演劇界はサッチャーが大嫌いだ。さらに、オーストラリアはオペラだけ²⁸⁾、カナダは退屈な国、老給仕アルフィーがブルブル震えているのは第一次大戦のガリポリの戦いに従軍した際の後遺症、そしてケニアがイギリスから独立するきっかけとなったマウマウ団の反乱や、インド人が今でも呪っているアムリトサル²⁹⁾の虐殺といった植民地ネタまで盛りだくさん²⁹⁾。

日本だったら当然タブー扱いの、自国の負の歴史を平気で笑いのネタにするイギリス喜劇。おゝ、ブリティッシュ！そのあっけらかんぶりに僕は心底あこがれている。

即興喜劇といっても、ゴールドーニ劇にはしっかりとした台本がある。イギリスの翻案版もよく練られたシナリオに則り、そのうえで即興劇に見せている。上質な笑劇とは、綿密に計算し、しかしその計算が見えない、どこまでが仕込みで、どこからがアドリブか判別できない作品のことである。

脚本と演出と、それから俳優の肉体芸と話芸のどれをとっても一級品の舞台。この笑劇はまさに衝撃である。

5. ベストシートの芝居って何だ——『アマデウス』

『アマデウス』は、NT オリヴィエ劇場の2階席最後列で見た。大劇場の円形ステージを俳優たちだけでなくオーケストラのメンバーたちも動き回るダイナミックな舞台だと聞いた。作品がNT ライブで日本に入ってくるのは知っていたが、映像だと役者にフォーカスするだろう。だから、ロンドンでは天井桟敷から俯瞰^{ふっかん}で見ておくことにした。

僕にとってはなつかしい芝居である。場所も同じオリヴィエ劇場で、ピーター・ホールが演出した『アマデウス』の初演（1979年）を見た。まだ大学院生のころ、メモも何

28) イギリス人はオーストラリアを馬鹿にしてはばからない。オペラはシドニーのオペラハウスを揶揄して、建物だけ、って話だ。いや、それも1959年に着工して、竣工は73年。1963年には、まだいつ出来上がるかわからなかったわけだ。

29) ガリポリは第一次大戦の激戦地。トルコのムスタファ・ケマルにイギリスを含む連合国軍が敗れた。マウマウはイギリス植民地だったケニアで起こったアフリカ人による抵抗運動の総称で、英軍が1956年に鎮圧したが、これを機に独立運動の気運が高まり、ケニアは1963年に独立した。辣腕の弁護士ハリーは反乱を起こしたマウマウを裁判で無罪に導いた、と。また、英軍によるインドのアムリトサルにおける虐殺事件（1919年）については、スタンリーのお祖父ちゃんが「アムリトサルの虐殺を計画して、国王ジョージ五世から褒美をもらった」と。おゝ、ブラック！

も残っていないので舞台に関する記憶は曖昧至極なのだが、とにかく僕はサリエリを演じたポール・スコフィールドにひっくり返った。以来、僕がいちばん好きなイギリスの男優はポール・スコフィールド、そして僕が最も愛するイギリス映画は彼がトマス・モアに扮した『わが命つきるとも³⁰⁾』(1966年)だと公言している。

また、ミロス・フォアマン監督のハリウッド映画『アマデウス』(1984年)はご存じの大ヒット作、アカデミー賞は8部門を獲得。僕も解説を書いたことがある³¹⁾。

作者のピーター・シェイファーは2016年6月に亡くなったばかりである。マイケル・ロングハースト演出の今回の舞台は同年10月に初日を迎えた。追悼公演の気分。けれども、黒人俳優がサリエリを演じるという。なんじゃ、そりゃ。奇をてらった?! へへッ、ポール・スコフィールドには遠くおよばないんじゃないか。しかし、劇評はどれも大絶賛である。半分期待し半分疑いながら、長年通い慣れたテムズ川南岸の大劇場へと向かった。

まずは舞台にサウスバンク・シンフォニアなる若手中心のオーケストラ20人が入場する。大きな円形のスラスト・ステージの後方に、もうひとつ舞台を組んで、空間を二つ作っている。

時は1823年、黒人の男女、ヴェンティチェロ——“そよ風”^{ちまた}、巷の噂を擬人化した演劇的な人物だ、ミロス・フォアマンの映画には姿を見せない——が、ウィーンの町は老いたサリエリの告白でもちきりだと伝える。二人は、サリエリが32年前にモーツァルトを殺したと叫んでいる、と語る。

サリエリが車椅子で登場する。私はイタリアの田舎商人の息子、名声がほしかった、音楽は神の芸術だ、努力を重ねてやっとウィーンの宮廷で認められるようになった、そこに現れたのがヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトだった……と、かつての^{カベルマイスター}宮廷楽長はさかんに観客に語りかける。

サリエリは長ゼリフが終わると、ステージの上でかつらをつけ、サッと若い姿に早変わりする。こういう趣向はお手のものだ。舞台は1781年にさかのぼる。

サリエリがモーツァルトと初めて出会うシーン。サリエリが横向きの椅子に座り、隠れている。若い娘コンスタンツェが駆け込んできて、ピアノの下に隠れる。モーツァルトが追いかけてきて、彼女にプロポーズする。アダム・ギレン扮するモーツァルトは下

30) 拙著『スクリーンの中に英国が見える』の第2部第2章「譲れない正義——『わが命つきるとも』」を読まれたし。

31) 同書の第1部第5章「ピーター・シェイファーの世界——『フォロー・ミー』、『アマデウス』、『エクウス』」をお読みあれ。

品なだみ声，ちょいとふざけ過ぎの感があるか。

彼の恋人，後に妻になるコンスタンツェは，黒人の女優が演じている。風のように噂を運んでくるヴェンティチェロも黒人，そして何よりサリエリ役のルシアン・ムサマティも黒人である。なんでこの役柄に黒人を，と必然性のない配役。でも，最近のイギリスの舞台は，社会の多人種，多文化状況を踏まえて，肌の色は関係なし。僕も最初は違和感があったが，見慣れてくると，また俳優に演技力があれば，外見はさほど気にならなくなる³²⁾。

モーツァルトはサリエリが彼のために作った^{・・・}ダ・サイ^{・・・}歓迎マーチを，あっという間に手直ししてしまう。早くもサリエリに殺意がよぎる。さらに，モーツァルトはサリエリが大切に育てたソプラノ歌手カテリーナ・カヴァリエリをパクリ，そしてオペラ『後宮からの誘拐』に起用する。だが，彼女はモーツァルトに婚約者がいると知って怒る。いや，彼女以上にはらわたが煮えくり返っているのは，自分の弟子に手をつけられたサリエリである。

サリエリは仕返しにコンスタンツェを誘惑しようとする。女たらしのモーツァルトには，生徒が寄りつかなくなる。金に困る。そこで，サリエリがコンスタンツェを呼び出し，仕事を紹介しよう，だが見返りがほしい，と。結婚2カ月の新妻はそっけないキスを1回だけ。

コンスタンツェが帰った後のサリエリの情けない顔がいい。彼はきまじめで不器用，「私の行ないは罪深だけでなく，滑稽だ」と。しかもコンスタンツェが置いていったモーツァルトの楽譜は書き直した跡がない。草稿が即完成稿，書く時にはすでに頭の中で曲が出来上がっているらしい。嫉妬の炎がメラメラと燃える。

サリエリは天才の書いた楽譜を床にまき散らし，破り，唾^{つば}を吐く。「神よ，これから我々は敵同士だ。」サリエリの戦う相手はモーツァルトではない，品性下劣な男を天上の音楽を奏でる代理人に選んだ神だ。

この芝居のキーワードは「平凡 (mediocre, mediocrity)」である。凡人は天才に勝てない。残酷な話だ。前半のクライマックス，サリエリの長ゼリフは悲壮感を帯びてくる。いいじゃないか。ロンドンの天井桟敷からロングで見た時より，NT ライブのアップで捉えたムサマティの方が重厚感にあふれている。黒人か白人かなんて，どうでもよくなってきた。

32) ストラットフォードで見た『オセロー』(2015年, RSC) では，ルシアン・ムサマティがイアゴを演じていた。オセロー役は同じく黒人のヒュー・クウォーシー。二人とも黒人だと，戯曲にある人種差別の問題が消え，代わりに両者を対立させる別の要素が浮かび上がってきて，新鮮だった。

幕間を挟んで、後半。コンスタンツェが戻ってくる。「どこですか?」と言って、スカートをまくる。「早く済ませましょう。」サリエリはたまたま彼女を止めて、「もうここに来るな」。ひどくみじめな気分になる。そうだ、私の目的はモーツァルトを破滅させることではない、敵はあくまでも神だ。

モーツァルトは『フィガロの結婚』を作曲する。伝説上の英雄なんか退屈だ、それより生身の人間を描きたい。だが、オペラにそんな登場人物は前代未聞。サリエリが横やりを入れ、書き直しを命じさせるが、モーツァルトは「完成した曲は完璧だ、直せない」と、相変わずの鼻っ柱の強さ。結局、作品は皇帝ヨーゼフ二世の鶴の一声で上演されることになる。サリエリは敗北感を味わいながら、興奮する。これは後世に残る曲だ、と。

超一流の芸術家には代表作がない、といわれることがある。人は一度成功作を生み出すと、“柳の下のだジョウ”とまではいわないが、すでに人々に受け入れられた作品の路線で次作を構想するものである。ところが、天才は前作も、それで得た人気も評判も忘れ、失敗を恐れずに、異なる質の作品に挑戦できる。シェイクスピアもビートルズも、最高傑作を選ぼうとすると、意見が分かれる。そしてモーツァルトも、荘厳な宗教音楽から華麗なオペラ、軽快で民衆的な曲まで一作ごとに音色の違う音楽を奏でた。

時は18世紀の絶対王政の末期、王侯貴族の時代から市民革命の時代へと移り変わりつつあった。『アマデウス』には、貴族的なるものと大衆的なものの葛藤、イタリアとドイツの対立、さらに聖と俗の混在など、ヨーロッパに昔からあるモチーフが散りばめられている。

それらを体現するモーツァルトの曲の数々を的確に挿入した芝居。しかもNT版では、若き楽師たちが舞台を駆け回りながら、時には寝っ転がりながら演奏する。サリエリやモーツァルトにも^{リアクト}反応し、ちょっとした役者ぶり、みごとに劇世界に溶け込んでいる。

俳優16人、歌手6人、そしてオーケストラ20人が渾然一体となったパフォーマンスである。小劇場の演劇が好みの僕が、俯瞰で鑑賞した大劇場のスペクタクルに目を見張った。

でも、挿入曲の演奏とオペラの光景はいずれも短い。スッと始めて、サッと終わる。すぐにシリアスな芝居に戻る。

モーツァルトの父レオポルトが他界する——映画と違って、父親自身は登場しない——と、息子は『ドン・ジョヴァンニ』を作曲して、確執のあった父の亡霊を舞台に呼び戻す。また、強烈な臭い^{にお}のする労働者たちが集う大衆劇場のためには、そう、『魔笛』

を書いた。この劇中劇はあまりセンスがよろしくない。いや、わざとダサくしているのだろう。

出だしは作り過ぎにも感じられたアダム・ギレンだが、後半になるとサリエリだけでなく、モーツァルトの生みの苦しみも舞台ににじませて、作品に厚みを加えている。やるねえ。

モーツァルトの作家魂、だが彼は疲労困憊。体中が痛い、毒を盛られたのかも、誰かが僕にレクイエムの作曲を依頼してきた。サリエリが深夜にモーツァルトの部屋に行くと、瀕死の男は、自分のための^{レクイエム}鎮魂歌を書いている、でも時間が足りない、と。サリエリが楽譜を見ると、舞台に音楽が流れる。これから先、長く奏でられるミサ曲だ、これがモーツァルトのための曲であるものか、永遠に生きる者に慰めなんて不要だ。

サリエリが手を出さずとも、モーツァルトは衰弱死した。サリエリは生き残り、長く人々に尊敬され、成功者の道を歩む。しかし彼の曲はしだいに忘れ去られ、モーツァルトの音楽は後世に残った。サリエリは^{かみそり}剃刀で首を切るが、死ねない。「私は凡人の守り神」、「すべての凡人たちを、私は許そう」——奥舞台の中央で、サリエリが悲痛な叫びをあげて、幕が下りる。

さて、NTライブの謳い文句に、「ベストシートから見る芝居」とある。オリヴィエ劇場の最後列から[・]引きのアンクルで見た「全体演劇 (total theatre)³³⁾」は、まさにエンタメの極致であった。だが、NTライブでは前述したように、俳優に焦点を合わせる傾向がある。その映像は僕の愛する小劇場の芝居と同質の魅力を発散する。『アマデウス』の文学的なテーマも、NTライブの方がより鮮明に伝わってくる。でも、もし僕がめったに買わない高価な席で『アマデウス』を見たら、また違う印象を受けるかもしれない。

う～ん、わからなくなってきた、ベストシートの芝居って何なのだろう。

(2018年8月 脱稿)

33) 演劇は戯曲だけでなく、俳優の演技、音楽、照明、舞台美術、衣裳などを統合した芸術だとする考え方。ピーター・シェイファーもそれをしばしば主張していたという。